

英語論文投稿への道 2017

大坪庸介
(神戸大学)

日本心理学会第81回大会
日本心理学会企画シンポジウム[JPAS-009]
2017年9月22日(金)9:20～11:00
@久留米シティプラザ

英語のノンネイティブとして英語の研究論文 (research articles) を書く

- イントロをシェイプアップして、議論を明確に
- Research Proposalを書いて練習
- レトリックに頼らない(頼れない)
議論を骨格だけにしてチェック
- 仮説は具体的に
- 考察は結果のサマリーから

Editorとして「良くない」と思う論文： イントロのシェイプアップを！

- イントロ(第2段落以降)が**大言壮語**すぎる
 - 第1段落は多少大きな問題設定で可
 - 第2段落以降
 - あるテーマで本を書いているわけではない
 - (レビュー論文を書いているわけでもない)
 - 自分の実際の研究にあった問題設定

Editorとして「良くない」と思う論文： イントロのシェイプアップを！

- イントロ(第2段落以降)が**大言壮語**すぎる例
 - Wilhelm Wundt once argued ...
 - James-Lange説とCannon-Bard説の心理学史的レビューをしようとしている
 - プチ・レビューになっている
 - テーマは同じだが、自分が扱う変数とは関係のない変数を扱った**諸**研究を少し詳しく説明しようとしている

関連論文を間引かないと プチ・レビューになる

- 読んだ論文は引用したい・・・
 - でも本当に必要なのか？
 - 読んだ論文から関連のない論文を間引く
- どこまで間引く？ ⇒ 必要最低限の骨格まで
 - 論文Aの結果と論文Bの議論をあわせると自分の仮説になる
 - 論文Aと論文Bだけ残して、他は間引く！
＝論文の骨格を描く

文献を間引けない・・・ 研究計画をしっかりと！

- 誰もやっていないからやってみました！
(研究計画段階の**失敗**)
 - やる価値がないから誰もやっていない？
 - 本当に先行研究がないと断言できない
To our knowledge, no one has investigated...

文献を間引ける 骨格が描きやすい

- (XとYの) 論争に決着をつける
X派論文, Y派論文, 矛盾の原因
(e.g., 調整変数, 交絡)
- 先行研究から新たな関係を見いだす
論文A: $X \rightarrow Y$
論文B: $Y \rightarrow Z$
仮説: $X \rightarrow Y \rightarrow Z$

実験する前に
research proposalを書こう

• **Research Proposal?**

≡ Pre-registrationの原稿

目的を書き、方法・結果を未来形で書く
誰もやってないからやってみます計
画では、結果パートが書けない！

仮説にたどり着いたら (仮説の導出を書く前に)

- 仮説導出チェック

研究のキーワードをX, Y, Zなどに置き換えても理解可能か？

置き換える概念が多い⇒冗長な議論、用語が一貫性を欠く

置き換えたら意味が通らない⇒ロジックが甘い(e.g., 用語に固有のニュアンスに依存)

「XとはつまりYである…」

X→Y(X=Y)が先行研究で示されていればOK

ポイント1・2・3

- イントロは必要最低限にして骨格をしっかり
- 研究を実施する前にresearch proposalを書いてみる
- 仮説導出のロジックをチェックする
 - 専門用語・概念語を記号(e.g., X, Y, Z)に置き換えて意味が通るかチェック

Research Proposalの例

- When do we change our attitudes? What kind of persuasions can effectively change target persons' attitudes? Many social psychologists have attempted to answer such questions because of both theoretical and practical importance...

(引用したい論文は、この冒頭の大きな話をするところに(e.g., xxx)という形式で突っ込む)

Research Proposalの例

- これまでの研究の矛盾を指摘: Edwards (1990) vs. Millar & Millar (1990)
 - Edwards: Affection-based attitudes are more susceptible toward affection-based persuasions.
 - Millar & Millar: Affection-based attitudes are more susceptible toward cognition-based persuasions because matched persuasions tend to induce stronger counterarguments.

Research Proposalの例

- 矛盾の説明: Response Formats Matter
 - Post-persuasion attitudes were measured with the *like-dislike* format in Edwards's experiment
 - Post-persuasion attitudes were measured with the *agree-disagree* format in Millar and Millar's experiment.
- **Affective** persuasions increase/decrease “liking,” while **cognitive** persuasions increase understanding (“agreement”).

Research Proposalの例

- Response Format説を検証するデザイン
 - A 2 (Persuasion type: **Affective** vs. **Cognitive**) × 2 (Response Format: **like-dislike** vs. **agree-disagree**)
between-participants design
 - 仮説: PT × RF交互作用

仮説チェック

- 問題設定

X (affective attitude) を効果的に低減するY (persuasion) はY1 (affective persuasion) だろうか、Y2 (cognitive persuasion) だろうか？

- 矛盾する知見

Edwardsの実験ではY1が効果的だったが、
Millar & Millarの実験ではY2が効果的だった

仮説チェック

- 矛盾点の説明

Yの後のXの測定方法(Z)の問題だ。
Edwardsの実験で使われたZ1 (like-dislike)だとY1の効果が反映されやすく、
Millar & Millarの実験で使われたZ2 (agree-disagree)だとY2の効果が反映されやすいのだ

仮説チェック

$$Y1 + Z1 \Rightarrow X \nearrow$$

$$Y1 + Z2 \Rightarrow X \rightarrow$$

$$Y2 + Z1 \Rightarrow X \rightarrow$$

$$Y2 + Z2 \Rightarrow X \nearrow$$

Operationalization (操作・測定) チェック

- 測定対象

$X_{OP} (\Rightarrow Z1_{OP}, Z2_{OP})$

- 操作

$Y1_{OP}, Y2_{OP} (\Rightarrow \text{先行研究どおり})$

仮説

- 仮説を読んだら分析方法が浮かぶ
- 差・相関があるだけではダメ、方向性も明記
- それぞれの仮説はひとつの分析・効果で扱える

仮説

- Hypothesis 1: *Mean X is greater in the A1 condition than in the A2 condition.*

*t*検定

⇒交互作用もあると予測するなら

- Hypothesis 1b: *The effect of A on Variable X is greater in the B1 condition than in the B2 condition.*

2(A条件) × 2(B条件)ANOVA

仮説

- Hypothesis 2: *Variable X promotes Variable Y.*
相関係数・単回帰分析

⇒この関係は他の変数を統制しても有意

- Hypothesis 2b: *X's effect on Y remains significant after controlling for Variables Z and W.*
重回帰分析

仮説—変数が多くてまとまらない

- SEMでの分析が必要
理想的なパス図を提示

ただし個々のパスについては、XがYを予測するというふうに仮説ができるはず。また、なぜXがYを予測すると考えるのか、先行研究から仮説を導出できていないといけない

考察の第1段落は研究のサマリー

- 過不足のないサマリーを

研究の知見がわかりやすいように書く

自分は把握していることを読者も把握していると思わない

ポイント4・5

- 仮説はできるだけ具体的に
 - 仮説を読んだらどんな分析をするかがすぐにわかるくらい具体的に
- (分析はおのずと決まる)
- 考察の第1段落は結果のサマリーを！